

広島大学 グローバルインターンシッププログラム
NEWSLETTER

海外インターンシッププログラム(G.ecboプログラム)
 —10年後の自分を探そう 世界と出会うインターンシップ—

第16号 Vol.9 No.1

2017年3月

目次:

海外インターンシップの意義	1
活躍するOB	2-3
G.ecbo運営委員・指導教員の視点から見たプログラム評価	4
特集！派遣生の就活体験談	5-7
2016年度派遣生帰国レポート	8-10
リスク管理体制	11
活動報告	12

“事にあたり、思慮の乏しきを憂うことなかれ”

2014年度からi-ECBO(国際協力研究科専門ECBOプログラム)の委員としてプログラムに関わってきましたが、私自身は基礎研究に没頭してきたので、正直なところ、海外インターンシップにどれ程の教育効果があるのか実感を持って語ることはできません。ECBOのスローガンに「10年後の自分を探そう」とありますが、10年前の私は、自分を探すことは海外インターンシップではなく、究極的には生物進化を研究することだと考えました。それ以降、研究者としてのトレーニングを積みできましたが、私の知る限り、研究者になるために最もよい方法は、当事者として研究に携わることだと思います。一人前の研究者として自立しようとする、専門知識だけでなく、様々なスキルが必要になることが分かります。そうしてみると、方向性は違えど、将来、国際的な仕事に携わりたいと考えているECBO参加学生も、日本での専門性の習得の前に実際に海外に出て、現地で必要なスキルを知ることの方がはるかに効率が良いのでしょうか。



大学院国際協力研究科 開発技術講座
 国際連携事業委員会i-ECBO部会委員
 井川 武 助教

西郷隆盛の言葉に「事にあたり、思慮の乏しきを憂うことなかれ」というのがあります。何かを成し遂げるために、思慮が足りないことを心配することはない、まずは事に当たれという意味です。実際のところ、学生さんの発表を聞いてみると、海外に行く前に日本で勉強する余地はかなりあるように思いますが、それはさておき、まずは海外で「事にあたり」、足りないものを帰国後に補っていくことを期待します。おそらく社会に出ても、そのような過程は形を変えつつ終生続くのではないかと思います。

現役学生の就活特集は
 5ページへ！！

活動予定 2017年度前期
 /Spring 2017 G.ecbo
 Schedule

- ◆4月初旬/Early April:
 G.ecbo Day(募集説明会)/
 G.ecbo Application Guidance
- ◆4月18日/April 18:
 応募締切/Application Due
- ◆4月下旬/Late April:
 選考及び発表/
 Selection & Notification
- ◆5月中旬/Mid May:
 事前研修開始/
 Commencement of
 Pre-internship Training
- ◆7月中旬/Mid July:
 インターンシップ開始/
 Departure to internship

Global Internship Program



G.ecbo海外インターンシッププログラムとは？

グローバルインターンシップを核としたサンドウィッチ教育を通して、既存の学問領域に縛られない多様な分野の課題に適應できる研究者の輩出、国際協力・国際援助の第一線をリードする実務者の養成と、世界中から集まる留学生や研修生の高度専門職業人としての育成を目指します。

活躍するOB

研究職へ

古家野 孝行 -重井医学研究所

(2009年度 英国癌研究所(英国)派遣 / 大学院先端物質科学研究科修了)

2013年3月に博士課程後期を修了し、その後、英国癌研究所(現The Francis Crick Institute)へポスドクとして留学。2015年10月から岡山にある重井医学研究所でテニュア研究員として「腎臓病」をテーマに日夜研究に励んでいます。



留学中のラボメンバーとの集合写真
(前列左から三人目が筆者)

－ 経験が活かされた場面・自分に残り根付いているもの

G.ecboでの経験や人との出会いが私の人生を決めたように思います。インターン参加前は、博士課程後期への進学は考えておらず、将来の明確な目標もないまま博士課程前期(修士)へ進学していました。G.ecboへの参加理由も「就活でアピールになるかな」「イギリスに行って、サッカー見られたらいいな」と非常に不純なものでした(関係者の皆様、すみません)。インターン先の英国癌研究所は医学・生命科学の分野において世界有数の研究機関であり、ノーベル賞受賞者を含む超一流の研究者が集結しています。そんな贅沢な環境での経験により、単純な私は研究職へ憧れ、そして海外留学したいと思うようになりました。博士課程後期在学中は、それまでの勉強不足もあり、指導教員には厳しくご指導いただきましたが、いつもロンドンのことを考えて頑張っていました。

学位取得の目処がついたころ、留学先を考えたのですが、インターンでの印象が強く残っていたため、同じ研究室へ行くことにしました。面接に行った時に、「成長したね」と言われた時は素直にうれしかったです。生活環境への対応や英語の問題など、不便なこともあったのですが、周りの人たちに助けられ、とても充実した留学生活を送ることができました。日本に戻ってきた現在でも、留学先の先生とは家族ぐるみの付き合いをしていますし、前研究室の友人がロンドンから自宅に泊まりに来たりするなど交流が続いています。こうして振り返ってみると、一つ一つの出会いや経験が、今に繋がっており、全てのきっかけはG.ecboであったと思います。

－ 後輩へのアドバイス

実は、研究職を辞めようと思っていた時期もあるのですが、(学会で一度だけ顔を会わせただけの)縁もあって今の職場に行き着いています。本当に人との繋がりを日々感じています。一つ一つの出会いを大切に日々頑張っていれば、必ずと道は開けてくると思います。

最後に、海外留学をするかどうかで悩んでいる人がいれば、ぜひ挑戦してみることをお勧めします。日本の科学技術が進歩し、インターネットを利用すれば世界中と繋がることができる現在において、留学の必要性は少ないかも知れませんが、人生の転機となる経験や出会いに遭遇するチャンスは多くなるし、自分では気づかないところで必ず成長できると思いますよ。



国際学会での発表の様子

活躍するOB

企業へ

金藤 冬樹 -住友金属鉱山株式会社

(2012年度 ロシア科学アカデミーウラル支所(ロシア)派遣 /

大学院理学研究科修了)

現在、鹿児島県の北部にある菱刈鉱山で金(gold)を探す仕事をしています。年に2~3ヶ月程度、オーストラリアやアラスカの探鉱現場(砂漠)・操業鉱山へ出張し、現地の地質技術者に混じって探鉱活動を行っています。今年の4月からは、オーストラリアの銅鉱山へ駐在し、現地の地質技術者と共に、鉱山を延命させるべく鉱山周辺での探鉱業務に従事します。



西豪州の探鉱現場への通勤に使う小型機にて
(前列左から二人目が筆者)

－ 経験が活かされた場面・自分に残り根付いているもの



西豪州の探鉱現場の様子

G.ecboのインターンシップでは、研究対象としていた鉱床に関する知見を深めることができたのはもちろん、渡航前のカウンターパートとのメールのやり取りや、現地の研究者とフィールドで岩石を見ながら議論するなど、貴重な経験をすることができました。それらは海外出張時や海外からの来客への対応の際に活かせていると感じます。

4月からのオーストラリア駐在は、今とは全く異なる環境で自身に何ができるのか不安ではありますが、G.ecboのインターンシップを通して身につけることができた「なるようになる!」という度胸と、何事も楽しむという姿勢で取り組んでいきたいと思っています。

酒寄 晃 -株式会社国際開発センター(IDCJ)

(2013年度 株式会社パデコ (バングラデシュ)派遣 / 大学院国際協力研究科修了)

私は株式会社国際開発センター(IDCJ)という開発コンサルタント企業に所属し、タンザニアと日本を往復しながら独立行政法人国際協力機構(JICA)の技術協力プロジェクト(ASDP農業定期データシステム能力強化計画プロジェクト)に従事しています。IDCJはJICA、外務省、国際援助機関から発注される調査業務やプロジェクトを受託し、クライアントに代わって業務を実施している企業です。主に経済・社会開発、地域・都市開発、評価などソフト分野を得意としています。

— 経験が活かされた場面・自分に残り根付いているもの

今の仕事はG.ecboプログラムでの経験がそのまま仕事に生きています。特にプロジェクトと一緒に運営する相手国政府の行政官(カウンターパートと呼んでいます)との関係構築、日本人専門家チーム内での仕事の進め方は自分の中に根付いています。例えば、カウンターパートと仲良くなる方法。チームが必要としていること・情報にアンテナを張り、いつでもチームのために動けるように備えること。また、日本とは異なる生活環境下に身を置くときの健康な心身の保ち方などです。これらのノウハウは体験によって磨かれますので、インターンで場数を踏めたことは私の財産です。



イリンガ州行政長官表敬訪問にて

— 国際協力・援助の仕事を目指される方へ。求められる能力とは？

開発途上国の国づくりに関われる大変やりがいがあり素晴らしい仕事です。しかし、その華やかさの裏には苦労も多いということを知った上で目指していただきたいと思います。参考までに現場で若手に求められる能力は以下になります。

1. 異文化適応力・想定外に対するレジリエンス(くじけず前向きに取り組む)
2. 交渉力および表現力(コミュニケーション力)・語学力
3. 好奇心・観察分析力・行動力
4. 自分のキャリアをデザインする・健康な心身を保つ
5. 上記に加え、将来にかけて自身の専門性を構築できるとなるとよい

G.ecboプログラムは、貴重な体験ができる画期的なプログラムだと思います。積極的に挑戦し、学術研究や卒業後のライフデザインに役立ててください。



州・県担当官向け全国研修の様子

インターンシップ関連の修士論文

今年度、本プログラム参加者11名が、大学院を修了しました(9月修了2名、1月修了1名、3月修了8名)。そのうち5名が、インターンシップの成果のもとに修士論文をまとめました。

2017.3修了	国際協力研究科 大橋 誠	Investigation of Energy-saving Techniques by Passive Cooling Strategies for Modern Houses in Hot-humid Climate of Malaysia
2017.3修了	国際協力研究科 佐々木 徹	Intergenerational Transfer of Altruistic Behavior Between Parent and Child in Disaster Affected Area of Rural Nepal
2017.3修了	国際協力研究科 田中 陽大	Estimating Preference on Microinsurance in Bangladesh, Evidence from Conjoint Survey Experiments
2017.3修了	国際協力研究科 松井 駿	Solar Driven Community Water Plant and Altruism in Rural Nepal
2017.3修了	国際協力研究科 郭 琦 (Guo Qi)	Effect of Microfinance Based on Observational Data from Revisited Bangladesh Household Survey



G.ecbo運営委員・指導教員の視点から見た プログラム評価

小池 一彦 教授

(大学院生物圏科学研究科 環境評価論講座, 生物圏科学研究科G. ecbo運営委員)

生物圏科学研究科では、これまでに3名がG. ecboを利用し、海外インターンシップを経験してきました。派遣人数は少ないながらも、部局学生の研究・インターンシップテーマに即した農学・環境系の受入機関を新規に開拓し、現地の研究者と共同で調査・実験を進めていくプロセスに関して充実したプログラムを提供しています。

学生を派遣した指導教員として印象に残っているのは、2014年にフィリピンのシリマン大学海洋研究所に派遣された池田正太君 (Newsletter 第15号を参照) です。池田君はサンゴ礁域に生息する大型の貝 (シャコガイ) に共生する藻類の遺伝的多様性について研究しており、フィリピンにおける現状について研究を進めようと、同分野で権威のあるシリマン大学に派遣されることになりました。しかし、重要な資源でもあり絶滅危惧種を含むシャコガイの採集許可を取るの容易ではなく、現地研究者の協力があつたとはいえ、調査を始める前に認可関係機関で調査研究の目的、実施計画をプレゼンテーションする必要がありました。また、分析試料の持ち帰りについても共同研究先のシリマン大学を含め多数のドキュメントのやりとりが要求されました。「お膳立てされた研究」を行うのではなく、単身現地に渡り、英語でこれらの交渉をやり遂げ、その成果として無事に調査を完遂できたことは、単に新規の成果が得られたということだけではなく、池田君の大きな自信ともなったでしょう。

いまだG. ecboの派遣学生は文系が主体ですが、理系学生もラボを抜け出し、このプログラムを積極的に利用し、研究を進めながらグローバルコンピテンシーを身につける機会にして欲しいと思います。

飯沼 昌隆 助教

(大学院先端物質科学研究科 量子物質科学講座, 先端物質科学研究科G. ecbo担当教員)

私は2012年度からオーストラリアにあるグリフィス大学の量子動力学センターへの派遣について、他の研究室の学生も含め3名の学生の派遣に関わってきました。それらの経験から率直な感想を述べさせていただきます。

帰国後の学生を見ますと、研究への姿勢が明らかに変わりました。これは研究の意義や重要性、および自分の研究の位置づけが明確に見えるようになったからだと思います。現地での研究者や同年代の学生との活発な議論を通じて、他の研究との違いを学ぶことや自分の研究を説明する機会を日常的に得たことが大きかったと思います。さらに日本人が身近にいない環境でのコミュニケーション経験を積むことで、英会話力も明らかに向上しています。これらはG. ecboプログラムの恩恵であり、その意味では大変感謝しております。

しかしその一方で、熱意はあるがTOEICの点数不足で申請をあきらめた学生や、優秀であるにも関わらず英語でのコミュニケーションにしり込みする学生も少なくありません。学生を指導する立場としては、多くの学生にG. ecboプログラムへの申請を奨励したいのですが、現地に日本人がいないために、優秀な学生からは拒否反応を示されます。グリフィス大学も含め英語圏の大学の教職員や学生は、英語でのコミュニケーションに慣れてない留学生に対してかなり寛容です。そのため以前から英語が得意でない学生にこそ海外での研究活動にチャレンジしてもらえないかと思っておりました。それに先端研の理学系や理学研究科ではG. ecboの浸透度が今一步という印象があります。

なかなか難しいですが、派遣学生の生の体験談も含めた説明会を各研究科で実施したらどうかと思いました。また多少TOEICの点数が低くても英語は所詮道具ですから、強い熱意があれば申請を認めてもかまわないのでは、とも思いました。英語が得意でない学生が海外での研究実績を積む、これに勝る教育効果はないと思います。

就職活動体験記 Part 1

松井 駿 (国際協力研究科 開発科学専攻・開発政策講座)
-独立行政法人国際協力機構(JICA) 内定

1) G.ecboインターンシップ

G.ecbo派遣先:ネパール・FORWARD Nepal (2015年 9月~10月)

- 参加目的

修士研究に関する調査, 実際の途上国の開発の現場を見るため。
入学後の早い段階で途上国現地に深く触れてみたいという想いが強かったです。

- 調査内容

ネパール農村にて貧困層向けの森林資源管理を目的として, 利用者の社会的な選好と家計状況について調査を行いました。社会的選好の測定にはお金を用いた経済実験という手法を, 家計調査には質問紙を用いました。

- 印象に残っていること

インターン先での最終報告会の時, 「君の調査は現地にとってどのように役立つのか? 」と質問され, うまく説明できなかったことです。私の研究は一見やや理論的なので, 自分でもこれが現実世界の問題解決にどう生きるか, 理解が曖昧なまま研究を進めてしまっていました。しかしこの言葉から, そもそも私が大学院に進学した動機が「途上国の問題解決に寄与したい」という想いであることを再確認し, 今後は研究の意義をしっかりと理解して, より途上国の役に立つ調査活動を行おうと決意しました。

2) 就職活動に与えた影響

- この企業・業界を選んだ理由

- ①(大学院入学当初より)途上国の発展に貢献したい
 - ②(G.ecboで途上国に滞在して)日本の存在を世界に対して高めていく仕事がしたい
 - ③(JICAインターンシップに参加して)政策決定に携わることの魅力を感じた
- これらの3点を満たすのがJICAだったためです。

- 自己PRに活用。G.ecboインターンシップ → JICA在外インターンシップ → 就活!

G.ecboでのインターンシップ経験を, JICA在外インターンシップの応募書類に書き, 合格することができました。このインターンシップに参加できたからこそ, JICA職員としての働き方について深く理解することができ, そこで働きたいと強く思うようになりました。

就活では, G.ecboで調査員2人と行った調査の話を非常に深く掘り下げられました。JICAでも異なる国籍の人たちと協同して物事を進めることが多いため, G.ecboの経験が入構後の働く姿と重なったためだと思います。その他の企業の面接でも, G.ecboの話をするとう「面白い経験をしているね」と言われることが多く, 興味をもって話を聞いてもらうことができました。

- 今後の目標

JICAでは実務者として働くことがより期待されますが, 実務面と学術面の両方から案件を考察できるよう, この2つのバランス感覚を持って仕事をしていきたいです。また, 多くの人にとって親しみやすい職員になることを目指します。

3) 後輩へのアドバイス

留学経験のある学生は沢山いますが, G.ecboの様に海外に一人で投げ出され, 現地の人を巻き込んで何かをするという経験はなかなか多くの学生がするものではありません。ですので, 就活でもそういった経験は企業に受けると思います。ただ, 目的意識もなく過ごしてしまうと何も残らず, 就活でも生かされないと思います。G.ecboのいいところは, プログラムの内容が各人に委ねられていることだと私は思います。目的を持って動き, そこで得た経験は就活にも使えますし, 大学院の研究活動にも非常に生かされたとは考えています。いろいろ言いましたが, 興味のある事には積極的に動いた方が絶対によいです! 失敗したとしてもそれがまたいい経験になるので, 頑張ってください!



就職活動体験記 Part 2

大橋 誠（国際協力研究科 開発科学専攻・開発技術講座）
-大成建設株式会社・都市開発本部 内定

1) あらゆる可能性を考える

G.ecbo派遣先: マレーシア・マレーシア工科大学スルタンイスカンダー研究所
(2015年 8月～10月)

- 研修内容

マレーシアのジョホール州に位置するマレーシア工科大学のSultan Iskandar 研究所で、現地の典型的な都市住宅であるテラスハウスの省エネ化手法を検討する実験住宅プロジェクトにメンバーの1人として参加しました。

- 参加目的

私は高専の専攻科出身なのですが、高等専門学校(高専)の建築学科では就職活動時、ほぼ全ての学生が企業の現場で施工管理として働くという選択肢しか与えられていません。そして多くの学生はそのことに何の疑問も持たず、仕事ではなく企業を選ぶという形で就職活動を行います。私は、なぜ高専の学生というだけで選択肢を与えられず、建築学科の大学生というだけで多くの選択肢が与えられるのか疑問に思い、すべての可能性から自分が本当にやりたいことを考えてみました。そして見つけ出したのが、都市開発という職業でした。建設の計画段階から携われる点が私にとってこの職業の魅力でした。この仕事に就くには高専から大学への進学が最低条件でしたが、普通にどこかの大学の工学研究科に進学するのではなく、かねてから考えていた世界中で活躍したいという思いを実現するために広島大学国際協力研究科に進学しました。そして、修士1年の夏にインターンシッププログラムに参加し、2ヶ月半をマレーシアのジョホールで過ごしました。

マレーシア滞在中に感じたのは、インフラや建築設備の不十分さでした。日本の都市部では今なお資本主義に基づいた資源の無駄遣いとも言えるスクラップアンドビルドが繰り返されているのに対し、発展途上国の都市部ではそもそも先進的なビルがそんなに多くありません。この状況を見て、私は発展途上国での都市開発への意欲がより一層高まりました。飽和した日本の都市部にビルを詰め込むのではなく、それが本当に必要な、望まれる場所に建てたいと思ったからです。将来的には、多くの発展途上国のハード面の先進国化に、都市開発という形で貢献したいと思います。



2) 就職活動アドバイス

就職活動時は都市開発という仕事の性質上、採用人数の少なさに大変苦労しました。最大手のディベロッパーでも採用は毎年30人程で、ゼネコンでは3～5人程です。このため多くの企業が学歴偏重の採用活動を行っており、企業によっては門前払いされてしまいました。聞いた話ではありますが、いくつかのゼネコンは採用活動解禁日以前に一部の有名大学を対象に既に都市開発の採用を終えており、解禁後に見せかけの説明会を行っているようです。大学の入試難易度と都市開発の適性に相関があるとは思えませんが、少なくとも現状は採用人数が極端に少ない職種においては、最初から入り口を相当絞った選考が行われる状況があります。だからこそ、学歴を除いたあらゆる点で誰にも負けないように準備する必要があると思います。そして人物重視の採用を行っている企業に出会った時に、そのチャンスを100%ものにするしかないようです。



省エネ化手法検討用に建設された実験住宅

就職活動体験記 Part 3

郭 琦（国際協力研究科 開発科学専攻・開発政策講座）
-JFEスチール株式会社 内定



1) G.ecboインターンシップ

G.ecbo派遣先: バングラデシュ・グラミン銀行 (2015年 9月 ~ 10月)

- 参加目的・調査内容

修士論文の調査を行うため、また異文化への興味から。

グラミン銀行ではインターン向けに数週間のプログラムが用意されており、基本的にはプログラムに沿って研修を受けることになりますが、私は修論の調査のため、それとは別に研究対象のフィールドを訪れたいという希望がありました。受入先の担当スタッフに相談したところ提案を快く受け入れてくださり、グラミン銀行のグループ会社から協力を得て村を訪問し、結果、修士論文に関するバングラデシュ農村部のマイクロ・ヘルス・インシュアランスの現状についての調査を行いました。

- この企業・業界を選んだ理由

私は以前からグローバル、特に新興国に事業を展開する会社で働きたいと考えていましたが、G.ecboインターンシップでバングラデシュでインフラが不十分な環境の中で生活している方々を目の当たりにしたことで、インフラ事業に従事したいという思いがより強くなりました。中でも鉄鋼業界はインフラを支える上で欠かせず、影響力が大きい点に魅力を感じました。就職活動ではこの経験を志望理由の一つとして話したところ、面接官にも納得してもらえました。優れた製品を発信することでより豊かな暮らしの実現に貢献することができる会社だと思い志望しました。今後はきちんとゼロから基礎を身に付け、国際的なプロジェクトに携われる能力を備えることが目標です。

2) 留学生としての就職活動

- 中国と日本の就職活動の違い

日本の就職活動では、自己分析をする必要がある点だと思います。日本企業は就活生の人柄を重視しています。自分の性格を理解する為にこれまでの経験を振り返り自己分析を十分にすることがある点は、中国の就職活動と相違があると感じました。

- 日本での就活でとまどったこと、大変だったこと、ハードルが高いと感じたこと

- ①エントリーシートの作成: 志望動機を先生や先輩にアドバイスを貰うことがよくありました。その際、「志望動機にならない」「このような志望動機では絶対受からない」といったコメントをもらった辛い経験があります(苦笑)。特に私の就職活動の軸とその企業がマッチしている、ということを文章で伝えるということには苦戦しました。
- ②面接: それぞれの会社によって面接のパターンが違い、準備に大変苦労しました。私はOB訪問を通して面接の練習をして頂き、指摘して頂いたことを本番で生かすようにしました。
- ③グループディスカッション: 自分の意見を初対面の人に伝えることは大変難しかったです。内容だけでなく、言葉自体も相手にとって分かりやすくするために工夫しなければならず、苦労しました。

- 日本での就職を目指す後輩達へのアドバイス

- ①早めに準備すること: 留学生は日本語能力をみられたと思います。日常会話ができるだけでなく、内容を要約して話す練習が必要だと思います。
- ②就職活動を体験した先輩、共に活動する仲間を探すこと: 先輩からは多くのアドバイスをいただきました。これは、留学生の先輩に限らなかったです。また、就活の仲間がいることで心強くなりました。私は友達2人とルームシェアをし、同じ目標を持つことで励みになりました。
- ③最後まで頑張る覚悟を持つこと: 就職活動は気持ちが大事です。くじけそうな時もあると思いますが、諦めないことが一番重要だと思います。



2016年度 帰国レポート / Internship Report

松井 理恵 Rie MATSUI (国際協力研究科)

Host	インドネシア教育大学 (インドネシア)
Period	2016年 9月 1日 - 10月 1日
Objectives	日本語を専攻している学生に、自分の専門分野「日本の中のイスラーム」に関する講義を行い、日本とムスリムの相互理解のあり方を学び修論に関する研究につなげる



業務内容は主に、先生たちの授業補助、日本語ネイティブスピーカーとして授業内で学生たちと会話練習をすること、そして日本語教育という枠組みを超えて、自分の専攻している分野に関する授業を日本語教育学科の学生たちに行うことであった。専門分野「日本の中のイスラーム」の講義の目的は、日本でのイスラームを知ること、日本とインドネシアとのつながりを知ることができること、そして、私の修士論文のテーマにも関連することができるよう、日本でムスリムがよりよく生活するために必要なことを学生たちと一緒に考えることであった。講義では、はじめに日本でのイスラームの歴史・現状を説明し、実際に自分たちが日本に行ったときにどのような困難に直面するのかを学生たちに予想してもらった。

学生たちの答えでは、①ハラールフード(イスラム教の戒律に沿った食材)を手に入れることができるかどうか、②モスクや、お祈りをする環境は整っているのかどうか、といった意見が挙げられた。その意見をもとに、日本でのハラールフードの現状・モスクの有無・そして実際にインドネシア留学生が日本でどのようなコミュニティを作りながら生活しているのか、写真を使いながら説明した。また、日本のムスリムたちがよりよく生活するために必要なことを議論した。この1か月のインターンシップで、日本では経験しきれない貴重な時間を過ごすことができた。また、学生たちの熱心に日本語を勉強する姿に感銘を受け、今後の研究の刺激になった。この経験を活かし、修士論文の研究に励みたいと思う。

金尾 太樹 Daiki KANAOKA (国際協力研究科)

Host	マレーシア工科大学スルタンイスカンダー研究所 (マレーシア)
Period	2016年 8月 31日 - 11月 18日
Objectives	高温多湿気候下における都市住宅の省エネ改修方法を検討するための実測調査



今回の実測に向けて、実験住宅に施さなければならない変更点があった。内断熱施工・エアコン施工・外断熱の取り外しである。全て大学外の業者との交渉を進める必要があり、移動やコミュニケーションが課題であった。内断熱施工に関しては、現地では全く普及していない施工になるため、詳細な図面を準備して使用する部材について説明し、現地で用意できない部材は日本から送る必要があった。業者に取り付けてもらうのは困難だったため、その工程は自力で行った。エアコン施工では大きな費用がかかるため、慎重に話を進めていかなければならなかった。最後の外断熱の取り外しでは、外壁一面全体に取り付けてある断熱材を取り外さなければならず、全て業者に行ってもらった。実測準備期間では、業者に依頼して進めることが多く、スケジュール管理が非常に大変であった。コミュニケーション面においてもスムーズにいかないことが何度もあり、言語以外での伝達方法も重要であると感じ、具体的な図面やイメージ図を示し作業を進めてもらった。

最初から最後まで自分で計画し実行した。現地に入る前に、行動を綿密にイメージし、あらゆる点について配慮をしなければスムーズに行動することが難しいと思った。プログラムや先生方、派遣先のスタッフの皆様のおかげで、当初の目的を果たし、無事研修を終える事ができた。このような機会をいただき、とても貴重な経験をすることができた。

Ayu Lana Nafisyah (生物圏科学研究科)

Host	アイルランガ大学 水産・海洋学部 (インドネシア)
Period	2016年 9月 16日 - 10月 24日
Objectives	Research collaboration on microalgae in mangrove ecosystem topic; sharing knowledge on fisheries and marine field

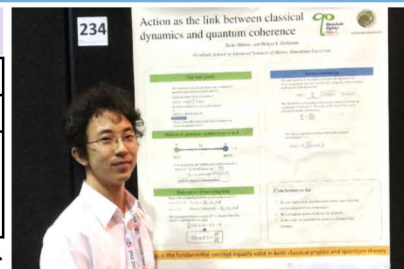


I finished my first sharing session with new students in the class of planktonology subject, I shared knowledge about harmful microalgae and they asked me some questions that impressed me at that time. I taught them based on my experience during my study at Hiroshima University, and shared how to prepare some tools and materials for sampling. We did sampling in the faculty fish pond in order to collect water samples, and observed them under the microscope. I motivated them to stimulate their eagerness on studying abroad. As a developing country, we need to learn many things from developed countries such as Japan. The problem is that young people mostly have little confidence in themselves, so that is why motivation is needed for them as a trigger. I am happy being one of the G.ecbo participants because apart from my research purpose, this program gave me challenges to improve my time management skill. In addition, I also learned how to communicate with other people properly. I would like to fully thank to my supervisor, Prof. Kazuhiko Koike, who encouraged me for this program and always helping me to understand all the things.

2016年度 帰国レポート / Internship Report

日比野 啓人 Keito HIBINO (先端物質科学研究科)

Host	グリフィス大学 量子動力学センター (オーストラリア)
Period	2016年 10月 7日 - 12月 12日
Objectives	国際的な研究機関にて最新の研究について見聞を広め、自身の研究に新しい視点を取り入れ、より説得力のある形の理論を組み立てる。また国際学会にて実習成果を発信する



同センター所長でもあるハワード・ワイズマン教授が率いる理論グループの学生とともに研究活動を行った。定期ミーティングでは、各学生が1週間を読んだ最新の研究についてFacebookのグループ機能を活用して発表しあい、その中でもメンバーの関心を集めたものについて20分ほどの発表を行う形式だった。範囲は量子力学全体だったので全てを理解することは困難だったが、毎週最新の研究について知ることができた。インターン3週目には私が行っている研究について発表を行い、様々な質問をいただいた。その場でうまく説明できなかった部分は、個別に先生方とお話して説明しアドバイスをいただきながら研究を進めていった。最終週にはブリスベンで開かれた国際学会に参加し、私も広島大学で行っていた研究についてポスター発表を行った。期間中は何人もの人に説明を行う機会があった。その中には似た立ち位置で研究されている方や、機械学習について研究を行っており、私達の研究成果の一つが量子力学の表現法をより簡単に導出できる点に注目してくださった方などがいらっしやり、有意義な議論を交わすことができた。インターン期間中を通して、研究についてのモチベーションを聞くことができ、自分のキャリアを考える上で大きな意味があると思った。また、たくさんの研究者との交流から彼らの物の見方や考え方に触れ、研究はもちろんそれ以外の部分でも実りの多い経験ができた。

張 永鳳 Yongfeng ZHANG (国際協力研究科)

Host	フロリダ州立大学 (アメリカ合衆国)
Period	2016年 8月 21日 - 9月 26日
Objectives	PIEやワークショップへの参加・学校訪問等によりインタビューを行い、英語力と国際感覚との関係について、今後の研究に有益な観点を見いだす



My objective was to find whether there were positive relationships between English ability and students' international-mindedness or not. Also, I tried to find how this connection was emphasized by the diversity of culture, religion, race and so on. Before this internship, I established my hypothesis that the lack of university student's international-mindedness could be related to curriculum design and the option of textbook. However, after the research activities I realized that I also needed to take the teacher training progress in universities into consideration, both from education policy's side and university decentralization's side. In China, teacher training at the pre-service stage from kindergarten to secondary school is progressing day by day. However, the system of teacher training in universities still lacks transparency and it varies from university to university. Therefore, in the next stage of my research, I will first conduct some interviews to university teachers and then redesign and complete my questionnaire that will be distributed among university students. This internship made me think a lot about internationalization of higher education. The importance of international-mindedness is aimed at not only students, but also teachers and faculties who are doing teacher training.

恵良 友三郎 Yuzaburo ERA (国際協力研究科)

Host	ネパール環境局 -Alternative Energy Promotion Center (ネパール)
Period	2016年 12月 16日 - 2017年 1月 15日
Objectives	ネパールの農村地域における、コメディ動画が人々の社会的選好に与える影響



ネパールの山岳地帯では水力を利用した小水力発電(マイクロ hidro)が主な電力源として使われていることが多い。それは継続的なメンテナンスが必要であり、維持のためのミーティングや集金などが村人などにより行われている。適切な維持管理を怠ったため、現在は無電化となってしまう村もある。つまり、運営維持には村人の協力が必要不可欠で、このような協力には社会的選好(利他性)が重要な役割を果たす。利他性の向上にはコメディ動画が有効に働くことが先進国における先行研究で分かっているが、発展途上国においてこの種の実験データは少なく、この先行研究の途上国での有効性は実証されていない。このため、コメディ動画がマイクロ hidroの維持に与える影響を経済学の観点から分析することを目標として、電化された村と電化されていない村における全世帯調査を行った。今回は途上国で1ヶ月以上1人で生活をし、またそれが研究を伴ったインターンであり、自分にとって初めて尽くしの研修であった。いくら準備をしても思わぬ事態に遭遇することは必須で、研究の難しさを肌で感じた。なかなか予定通りには進まなかったが、その中でどう軌道修正していくかという力の方が重要であるように感じた。将来海外で働くことを目標にしているが、そのために自分が何をすべきか、特に日本人として何をすることができるかということ深く考えるようになった。

2016年度 帰国レポート / Internship Report

曹 蕾 Lei CAO (国際協力研究科)

Host	カンボジアメコン大学日本語ビジネス学科 (カンボジア)
Period	2016年 10月 23日 - 12月 31日
Objectives	私立大学における日本語専攻の学生を対象とした実践的プログラムに関する研究・カリキュラムの有効性に関する調査



将来は中国での日本語教育事業に貢献したいと考えており、そのためにG.ecboプログラムに参加した。今回のインターンシップで初めて海外で日本語教師の経験を得られ、大学院の研究で培った知識を生かし色々なチャレンジをすることができた。実践することで日本語教育への自信を身につけ、カンボジアの学生と交流することで教育開発国際協力という研究分野の新たな理解につながると考え、自分の将来をさらに拓げていきたいと思った。日本語のネイティブスピーカーではないので、外国人の立場で自分自身の日本語学習経験をシェアし、学生達の日本語学習のモチベーションを高めることができたと思う。また、私が将来焦点を当てるべき教学方向を学生達から学んだと思う。日本語を専攻している学生を対象とした研究課題に関する実例調査や、私立大学のカリキュラム運営における効果的なカリキュラムを計るために実際に学生個人のニーズに合わせ、カリキュラムの有効性に関する調査を実施した。カリキュラム改善に大いに貢献することはできなかったものの、授業で出てきた問題点を洗い出し改善策のアイデアを考え、ある程度力を尽くすことができたが、カリキュラムに関する専門知識が勉強不足だったため、大学教員の立場でのカリキュラム運営の取り組みの重要性を判断できなかった。今回のインターンシップで得られた日本語教育に関する知識と国際理解実践から得た経験は将来の生活や進路に役立つものだと思う。また、今回の経験を活かして全世界にいける日本語教師になりたいという思いがさらに強くなった。

Venephet PHILATHONG (国際協力研究科)

Host	在ジュネーブ国際機関ラオス代表部 (スイス)
Period	2016年 8月 12日 - 10月 19日
Objectives	To acquire working experience in a recognized International Organization and collect information for the reference of writing dissertation.



I have been mainly assigned on follow up disarmament and some relevant conferences at UNOG. Before attending all conferences, I had prepared myself by studying about the meeting objectives, the procedure and the previous discussion including the position of Lao PDR and other countries on the concerned topics. The various tasks offered me some challenges and I had some concerns about the effectiveness in completing my tasks. I believed that dealing with each work required specific knowledge and considerable time to get familiar with the issue. Therefore, with my limited time and my main purpose of having this internship on disarmament sector, I could not cover other tasks sufficiently. However, I learnt some basics and generalities of other sectors. I deeply believe that this opportunity will prepare the ground of some work for me to continue building my career in the near future. Finally, all works and activities that I have done during this internship have sharpened my ideas and shaped my personality, so I am now ready to play more essential role in contributing to my academic and work affiliations fruitfully.

富田谷 桃子 Momoko TOMITAYA (文学研究科)

Host	インドネシア教育大学 (インドネシア)
Period	2016年 9月 1日 - 9月 30日
Objectives	日本語を専攻しているインドネシア教育大学の学生に、自分の専門分野の授業を行う



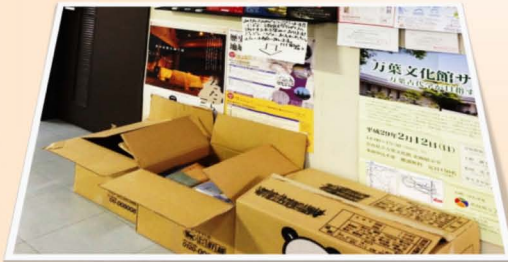
「中級会話」・「語用論」・「日本の社会システムと文化/比較社会学」等の授業を担当し、日本の通史・文化の概説、神道・仏教の歴史・概念、また、浴衣・折り紙・日本の四季について講義した。学習者の日本史や日本文化に対する興味関心、学習意欲を高め、宗教にまつわる問題意識を持ってもらうことができたと思うが、外国の人に伝えることを通して、自身の知識不足を感じた。「どのように伝えるのか」という経験から、これらのテーマを客観的に見つめ直す好機となった。また、日本の宗教(特に神道)にまつわるアンケートを取り、60名近くの回答を得ることができた。これを日本人学生の回答と比較することにより、多神教・一神教の人々の考え方や相違点を見つけ出し、提示することが可能となった。これらのデータは修論とは別の取り組みとして研究していくことにする。また、学生や現地の人々との交流を通して自分自身が持っていたイスラム教への偏見を払拭することができ、アジアの歴史における宗教の形成・変容の過程に、より興味を持つことができた。インドネシアには日本語を熱心に勉強する学生がいる傍ら、日本の歴史・文化等をしっかりと伝えることのできる人材・教材が少ないことを知った。図書館を見学したが、古い教材が多いように感じた。私は高校で使う日本史の教科書・図録を寄付して帰国したが、次年度行かれる方も、使わない教科書や本があれば寄付をすることをお勧めしたい。

～派遣学生・帰国後の活動～ インドネシア教育大学へダンボール10箱の本を寄贈しました

インターンシップを終え帰国した富田谷桃子さんは、研究室の仲間と一緒に使わなくなった本の寄付を募りました。集まった本は大学院文学研究科勝部教授をはじめ、日本史学研究室の先生方のご協力のもと、2月1日の船便でインドネシア教育大学日本語学科へ発送されました。

インドネシア教育大学(UPI)でお世話になった学生へ感謝の気持ちと日本語学習への激励の思いを込めて、大学院文学研究科日本史学研究室を中心に、また同研究科言語学研究室からもご協力を賜り、本をお送りしました。皆様のご協力のおかげで様々なジャンルの沢山の本をお送りすることができました。

私たちの本がUPIの学生の日本に対する興味関心を高め、語学力の向上に少しでも役に立てられることを願います。(富田谷 桃子(文学研究科))



インドネシア教育大学に日本の本を贈りませんか?
Why don't you send Japanese books to Indonesia University of Education?

読まなくなった本、どうしていますか?

Selamat siang! Nama saya Momoko Tomiyata.

こんにちは、国史M1の富田谷桃子です。私は今年の9月、インターンシップでインドネシア教育大学(UPI)に行ってきました。UPIでは約400人という沢山の学生が日本語を熱心に勉強しています。実際に学生と触れ合い、彼らは日本のサブカルチャーや伝統文化、日本の歴史にとっても興味があるということを知りました。

【お知らせ】
UPIには日本語ネイティブの先生が殆どおらず、図書館にある日本の本はどれも古いものが多かったです。UPIには日本語ネイティブの先生が殆どおらず、図書館にある日本の本はどれも古いものが多かったです。そこで、皆さんの家に眠っている読まなくなった教科書、漫画、雑誌などをUPIの学生に贈りたいと考えております。毎年、ご協力をお願い申し上げます。

詳細

- 読まなくなった教科書、漫画、雑誌 etc.、各ジャンルは問いません。
- 年明けにダンボールを発送する予定です。実家からどしどし持って来てください。
- 送料日時：未定。来年度2月以降を予定しています。なお、言語学研究室と共同企画です!!

問い合わせ
費用等ございましたら、M1 富田谷までご連絡ください。

2016.11.11

多ジャンルにわたる小説や漫画、雑誌、辞典類が集まりました!

リスク管理面から見たインターンシップ

G.ecboプログラムでは、本学が作成した「学生の海外派遣に関する危機管理マニュアル」に基づき、外務省海外安全ホームページの各国・地域危険レベル情報をもとに学生を派遣しています。また、海外において予測される各種のリスクに備えるため、大学で実施する「海外渡航リスク管理セミナー」の受講を義務付けています。

外務省 危険情報	http://www.anzen.mofa.co.jp/masters/risk.html#01	G.ecboプログラムでの対応
Level 1 「十分注意してください。」	その国・地域への渡航、滞在に当たって特別な注意が必要であることを示し、危険を避けていただくよう、おすすめするものです。	派遣は実施、派遣中の者は継続させるが、注意を払う。
Level 2 「渡航の是非を検討してください。」	その国・地域への渡航に関し、渡航の是非を含めた検討を真剣に行ってください。渡航される場合には、十分な安全措置を講じることをおすすめするものです。	原則、派遣は延期又は中止、派遣中の者は帰国させる。
Level 3 「渡航の延期をお勧めします。」	その国・地域への渡航は、どのような目的であれ延期されるようおすすめするものです。また、場合によっては、現地に滞在している日本人の方々に対して退避の可能性の検討や準備を促すメッセージを含むことがあります。	渡航は中止、派遣中の者は即刻帰国させる。
Level 4 「退避を勧告します。渡航は延期してください。」	その国・地域に滞在している全ての日本人の方々に対して、滞在地から、安全な国・地域への退避(日本への帰国も含む)を勧告するものです。この状況では、当然のことながら新たな渡航は延期してください。	

Avoid risk in all circumstances!

G.ecbo-G.ECBO海外インターンシップの手引書 2016年度

バングラデシュ・ダッカにおける銃撃・人質テロ事件勃発後のG.ecbo事務局の対応

G.ecboプログラムでは、今年度夏期に2名の学生をバングラデシュへ派遣予定でしたが、事件発生を受け、以下のとおり対応しました。

発生日時: 平成28年7月1日(金)21時30分頃(現地時間。日本時間2日0時30分頃)
発生場所: バングラデシュ・ダッカ市内のレストラン

7月2日(土) G.ecbo運営委員長より、i-ECBO部会、バングラデシュ派遣予定学生の指導教員、事務局員に対し、緊急メールを送信。危険レベルがあがるのが想定されるため、派遣中止も視野にいれ、状況を注視することを確認した。

7月4日(月) 事態の深刻さが明らかになったため、バングラデシュへの派遣中止を検討。指導教員を含めた意見交換のため、臨時打合せの日程を調整した。

7月5日(火) 臨時打合せを実施。バングラデシュへの派遣中止を決定。続いて、派遣取り止めとした学生について、指導教員の意見を聞いた上で派遣機関の変更・事前教育の継続について確認した。その後、派遣機関担当者への中止連絡及び派遣予定学生への対応にあたった。

公益財団法人広島大学教育研究支援財団及び、広島大学冠事業基金より奨学金を授与されました。出資者の皆様方の多大なるご支援に、厚く御礼申し上げます。

海外での経験を通じて視野を広げ、グローバルに活躍する人材として大きく成長するよう期待するとともに、周囲への感謝の気持ちを常に忘れず、自分の可能性を信じて歩んでほしいと激励の言葉が贈られました。(冠事業基金授与式)

教育・研究活動の発展、国際社会で活躍できる人材を育てることを目的とし、ご支援いただきました。財団の開催する報告会にて、それぞれの活動成果を発表しました。(公益財団法人広島大学教育研究支援財団)



2016年度 活動報告

4月6日	G.ecbo Day (募集説明会)	10月7日	G.ecbo Day (冬期募集説明会)
4月19日	海外インターンシップ公募締切り	10月18日	遡上教育型インターンシップ公募締切り
4月26-27日	選考面接	10月21日	合同留学体験報告会(発表者: 張永鳳さん)
5月9日	合同留学体験報告会(発表者: Maskey Bijanさん)	11月14日	遡上教育型インターンシップ選考面接
5月18日	英語プレゼンテーションガイダンス	11月16日	広島大学冠事業基金奨学金授与式
5月30-31日	夏期)第1回事前英語プレゼンテーション研修	11月29日	遡上教育型インターンシップ渡航前英語プレゼンテーション
6月21日	海外渡航リスク管理セミナー	12月1日	遡上教育型派遣生インターンシップ開始
6月27-28日	夏期)第2回事前英語プレゼンテーション研修	12月7日	冬期)第3回事前英語プレゼンテーション研修
7月27-28日	夏期)第3回事前英語プレゼンテーション研修	12月14日	冬期派遣生インターンシップ開始
8月中旬	夏期派遣生インターンシップ開始	12月20日~	帰国報告会
8月24日	冬期)第1回事前英語プレゼンテーション研修	2月14日	広島大学教育研究支援財団研究助成金等成果報告会
9月21日	平成28年度第1回G.ecboプログラム運営委員会	3月2日	平成28年度第2回G.ecboプログラム運営委員会

2017年度G.ecbo海外インターンシップの募集は4月から開始します！
派遣先等の詳細はHPをご覧ください。

G.ecbo will call for 2017 participation in April! Go to our website for the list of intern locations and further details.



事務局編集後記

2016年7月にバングラデシュ・ダッカにおいて、銃撃・人質テロ事件が起きたことは記憶に新しいと思います。本プログラムでは2名の学生がバングラデシュでのインターンシップを予定していましたが、事件の影響により渡航先の変更を余儀なくされ、事務局でも対応に追われました。他、インドネシア・トルコ・フランス・アメリカなど、世界の様々な地域においてもテロ事件が多発しており、これまで以上にセルフディフェンスの必要性を意識した年となりました。また、今年度の派遣生からはスリヤやぼったくり未遂、航空会社の手違いによるダブルブッキング、手荷物遅延等についても報告を受けました。派遣国での生活に慣れるにつれ、次第に危機管理意識が緩みがちになるものですが、滞在中は適度に緊張感を持った行動を心がけ、積極的に治安情報を収集するよう、一層指導していこうと思います。(G.ecbo事務局)

Global Explorers to Cross Borders
G.ecbo



広島大学 学生プラザ
グローバルキャリアデザインセンター内
G.ecboプログラム事務局
Email: gecbo@hiroshima-u.ac.jp
https://www.hiroshima-u.ac.jp/gecbo